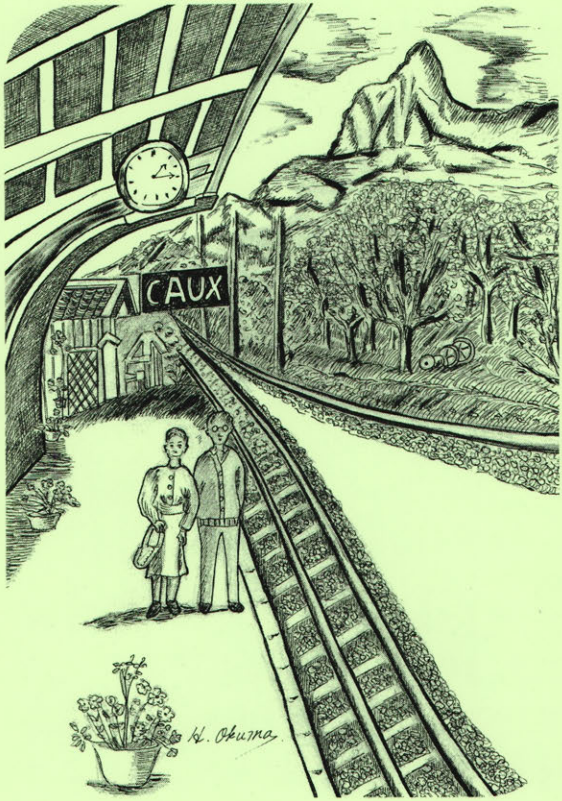
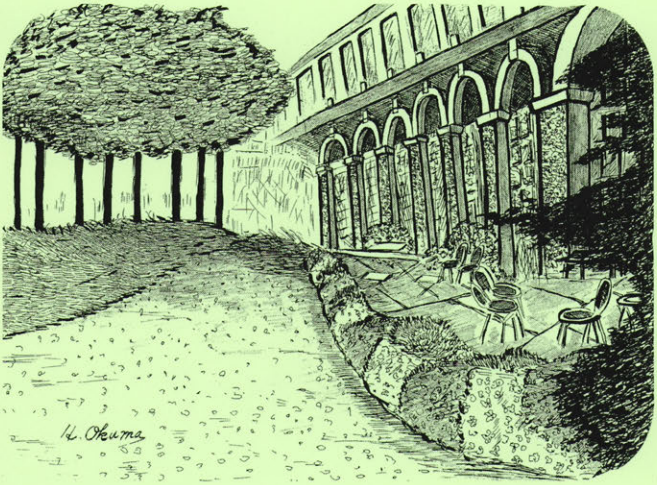
出逢い・・・



—MRAと私—

No. 3



目　次

ヒマラヤの麓(ふもと)の静けさの中で　石田　進……1 P

他人を思い遣(や)る心の輪を拡げよう　小宮綾子……8 P

29年振りに訪れたマウンテンハウス　沖田幸治……13 P

世界中の人々が助け合って生きていくならば　大熊洋子……18 P

チェンジの源(みなもと)　川口昌宏……24 P

私に与えられた役割　藤田寿子……31 P

日本がアジアの「燈台」になるために　榊たか子……41 P

ヒマラヤの麓の静けさの中で

石田　進

六年前、大阪のある民間国際協力団体の集会に、外国のお客さまを案内してお見えになられたＭＲＡのメンバーの方から**ＭＲＡ関西秋季大会（注１）**へお誘い頂き、ＭＲＡの何であるかもよく知らないまま早速、その秋の大会に参加させて頂きました。

初参加の私は、その自由で、かつ真面目な雰囲気の素晴らしさに感激し、これこそ国際赤十字の精神に優るとも劣らない立派な生き方の指針だと心を打たれました。

その頃すでに**「ネパール教育協力会（ＪＥＣＳ）」（注２）**を設立し活動しておりま

したが、毎月のＭＲＡの例会に出席している間に、ＭＲＡの四つの標準を自己の生き方ばかりでなく、海外協力活動の在り方についても活かしたいと決心しました。

しかし、この四つの標準を説明することはなかなか難しく、却って誤解されてしまう危険性も感じましたので、ＭＲＡ精神の当協力会への活かし方として、「ネパール教育協力会世話人（スタッフ）心得」として、次の四つの標準を指針として掲げました。

「ネパール教育協力会世話人は、①正直、②純粋・清潔、③愛、④奉仕をもって努めます」というものです。これは、当協力会の行動三原則⑴ボランティア、⑵中立（政治・人種・宗教・思想）、⑶自主・独立の基礎となるものです。この世話人心得は、当協力会の運営や活動の在り方にどれほど力になっていることでしょう。そのことを心から感謝し、その一例をご紹介いたします。

サラスワティ小学校へ簡易水道をひく

世界には義務教育も満足な教育設備もなく、多くの子供達が貧しさのため学校にも行けない国が少なくありません。十年前、ネパールを訪れ、教育環境の劣悪さと就学率の低さに驚かされた私は、帰国後、ネパールの教育の振興に協力しようと「ネ

パール教育協力会（ＪＥＣＳ）」を設立しました。ネパールの青年を日本に留学させたり、現地の小学校に黒板、机、地球儀、絵本、ノート、鉛筆などの教育用具を贈ったりするのを初め、校舎を建築するための資金集め、ボランティア教師の派遣、簡易水道の設置などといった地道な活動を続けています。当協会は、日本全国からネパールの草の根の人々に関心を寄せて下さる九百十名の会員の皆様方によって支えられています。

一九八九年の冬期休暇中に、代表世話人として八回目のネパール訪問を自費で果たしました。早速山頂の村へ八時間のトレッキングを行い、翌日も当協力会の支援で完成した**サラスワティ（注3）**小学校への簡易水道の水源の視察のため、派遣ボランティア教師の畠博之先生や村長、学校理事らと山道を登りました。

この簡易水道は、山頂近くの水源から小学校までパイプを埋設したもので、途中にタンクが二ヵ所あります。当協力会がパイプ、セメント、金具などの資材を提供し、企画、設計、施工は全て村民の労力奉仕によって賄われました。

村々へ簡易水道を埋設したり共同井戸を設置する場合は、まずその村ができる限りの自助努力をして資材を集め、それでも尚不足する分を当協力会が協力するとい

う方式をとっています。そうすることにより、完成後の管理や補修は彼らが自主的に継続して行います。また、彼らは自らの手でここまで開発できたという自信と誇りと喜びを味わい、新たな希望を見い出すことができるのです。

企画、施工、資材に至るまで、百％外部からの援助で行うと、村民は便利さに喜びはしますが、故障修理に際しては労賃を出さなければ働かなくなり、自主的な管理は難しくなります。たとえ奉仕する人がいたとしても、技術移転が行われていなければ修理は困難となり、そうした失敗例の残骸をネパールでも時々見かけます。ネパールに関して日本で有名なある日本人ドクターの講演や書物での成功物語とは裏腹に、現在、それらが全部失敗しているのは、その辺のやり方にも原因があるのかも知れません。

畠先生との対立

さて、サラスワティ小学校簡易水道の途中のタンクは、縦横高さ各一・五メートルもある立派なコンクリート製のものでした。丘の上の小学校へと続く山道を歩きながら、畠先生に、「あのタンクの外壁にネパール語で『この水道は、日本ネパール教育協力会の支援によって設置されたものである』とペンキで大きく書いて、その

写真を撮って送ってくれませんか」と話しかけると、大阪大学で物理学と数学を修めた温厚なこの青年教師は「それは駄目です。石田先生分かって下さい。彼らの自主性とプライドはどうなりますか」と静かに応えました。

「うん、それはよく分かる。しかし、この協力会を会社に例えれば私は社長であり経営というものも考えなければならない。会員の方々に報告し、満足して頂くことも考えなければならない。その程度ならばよいではないか。是非、そうして下さい」。

すると畠先生は声を強めて「絶対反対します。石田先生の立場は分かりますが、そんなことをしたら失敗します。断固反対です」とますます激しく反対します。

私は一瞬、「石頭だなあ」と思いました。しかし、畠先生の言うことが正論であることも実は認識していたのです。

二人の間に沈黙が続きました。

足音以外は音一つしないヒマラヤの麓(ふもと)の静けさの中で、私は静かな時間を持ちました。

村の理事会の結論

雄大な自然の中で、心が静まっていくのを感じました。頭の中にMRAの四つの

絶対標準が浮かび、次に当ネパール教育協力会世話人心得が浮かんできました。何故かこの時、心やすまる郷里京都の調和のとれた美しい庭園が思い出されました。「正直、純粋・清潔、愛、奉仕」、そして「調和と平和」。私の心は決まりました。

沈黙を破って私は言いました。

「畠先生。私の立場ばかり主張してすまなかった。あなたの意見の方が正しいので私の主張は撤回します。しかし、製作年月日だけは書き入れるよう提案する必要はあるでしょう」。

畠先生はほっとした顔でそれを了承し、その日の村の理事会に提案しました。

菩提樹の大木の下で開かれていた理事会には私も招待されて同席しましたが、そこで出た結論には驚かされました。

「製作年月日の記入は大切なことであり、よく教えてくれました。理事会としては、ネパール教育協力会とあなた方二人の名前も併せて記銘したいがよろしいですか？」。

私達二人は顔を見合わせるばかりでしたが、心は決まっていました。

「私達の提案は製作月日に関してのものであり、その他の記銘の有無は村の皆さんの問題なので私達が関与するつもりはありません」。

この体験を通して私は「何が正しいのか」というＭＲＡの教えを身を以て学び、ＭＲＡ精神の偉大さを体験させて頂きました。

平成元年三月に当ネパール教育協力会は、発足満十周年を迎えることができました。その上に同年七月十日、外務省にて、国際協力に大きな役割を果たし、世界平和に貢献した団体として外務大臣表彰を受けました。これは、ご支援下さった会員の皆様のご協力とＭＲＡ精神のお陰であると深く感謝しています。

（高校教諭　ネパール教育協力会ＪＥＣＳ代表世話人　京都府京都市在住）

（注1）ＭＲＡ関西秋季大会

緑豊かな落ち着いた環境の中で、世界の諸問題や個人の抱えている悩みなどを一泊二日の日程でゆっくりと語り合い、その解決に向けての道を一緒に探ろうと、一九七八年から毎年、神戸の住吉研修所で開催されている。

日本人がスイス・コーのＭＲＡ世界大会に参加して体験するような感激を日本国内でも味わってもらいたいという発想から始められた。これまで十二回開かれ、国内外より延べ千人程が参加している。

問い合わせ先　〇七八（八五一）一一七五　住友

（注2）「ネパール教育協力会（ＪＥＣＳ）」

ネパールで医療奉仕活動をしていたある医師から、留学生の支援を依頼されたことがきっかけとなり一九七九年に設立された。「和を以って共に生きる。教育は人を作り、村を作り、世界を作る」をモットーに、立ち遅れているネパールの農村部の生活向上のための「地の塩」として働く人材育成と、初等教育への支援を軸に農村の自主的開発に協力している。これまでの主な活動として、小学校校舎建設（十五校）、識字学級開設（二十四村）、ネパール語絵本の制作と配布（約一万冊）、簡易水道、及び井戸（三ヵ村）の設置などがある。「ネパール教育協力会だより」（隔月）を発行。

連絡先　〇七五（八四一）三九一七

（注3）サラスワティ

ヒンドゥ教の学問・教育の神様

他人を思い遣(や)る心の輪を拡げよう

小宮綾子(こみやあやこ)

戦後間もない頃にMRAの名前を聞いたことはあったのですが、当時は国連のユネスコのようなもの位にしか考えず、また、それ以上深く知ろうともしませんでした。

その後はMRAの名前さえも忘れておりましたが、あれは何年前のことだったでしょうか、主人が突然、「息子の泰二をスイスのコーにあるMRAのマウンテンハウスに行かせようと思う」と言い出しました。それからほんの十日間足らずのうちに、急いでパスポートの用意やら旅支度をさせて息子をスイスに送りました。

その後わが家では、MRAのことが度々話題に上がるようになりましたが、このようにMRAに対して何の疑問も不安も抱かず、すんなりと受け入れられたのは、戦後、埼玉でも行われていたMRAの活動を主人が知っておりましたことと、日頃尊敬する**榊たか子さん(注4)**のお勧めであったからです。

約一ヵ月間コーに滞在した泰二は、MRAの名前も知らなかったのですが、榊さんからその目的や最近の活動などを説明して頂き、「百聞は一見にしかず」の言葉通り、英語はたどたどしくとも一生懸命他の参加者の方々と一緒に努力することだけを心に決めて日本を発ちました。お陰様でコーの希望に満ちた暖かい雰囲気の中で、とても楽しく感動的な毎日を送ったようです。

それ以来、私はそれまでの己れの不勉強を悔い、外国の方々に言葉を上手く伝えられないのをもどかしく思いながらも、私にできることはやっていこうという気持でお手伝いしてまいりました。

確かに当初、私にとって正直、純潔、無私、愛というMRAの四つの絶対標準を守るということは深く考えれば考えるほど難しく思えたのも事実でしたし、集会に参加されるどの方もがとても立派に見え、ついつい自分と比較してしまうことも度

々ありました。

しかしよく考えてみれば、それはただ他人に格好よく見られたいという自分の見栄以外のなにものでもなかったし、MRAは私に特別な人間になれと要求している訳でないことが判りました。

今、MRAを通じて得た知識をもとに改めて内外の出来事を考えてみますと、平和の問題、国際協調、政治における信頼の関係も、個人間のそれと根本は同じであると思われます。科学や経済の発展が人類に素晴らしい物質的貢献をした反面、退廃と不道徳を同時にもたらしたと思えてなりません。今こそMRAのような考え方や生き方が本当に必要とされているのだと思います。

これまでMRAが、国際問題の解決や民族和解のために、世界中の様々な場所で潤滑油的な役割を果たしてきたというお話は、そのメンバーとして大きな心の支えになっています。

相馬雪香さんの「考えているだけでは駄目で、身近なこと、自分のできることから一歩ずつでもいいから実行していく」という言葉に全く同感です。

先日、榊さん、そして榊さんが理事長を務める国際交流語学院に関係する方々と

ご一緒に上海にまいり、私どもが保証人をして差し上げている日本語就学生達の父兄にお会いしましたが、子を思う親の心に国境や人種の差はないとしみじみと思いました。

心配の尽きない親心を少しでも軽くしてあげようと思い、日本の生活状況や公的機関の学院に対する信用の高さ、そして榊さんや校長先生のお人柄等を説明し、あとは学生個人の努力にかかっていることなど、まるで自分のことのように一心にお話しするうちに、多くの人々に出逢い話すことが心の交流の第一歩なのだと強く感じたのです。

「書類上だけでの保証だったら、ここまで心が通うことはなかっただろう、常に他人を思い遣るという心があれば、世の中の争いごともなくなっていくだろう、これがMRAの心なのだ」と思いました。

こうして様々な国々の方々と交流できるのもMRAの楽しさの一つです。スイスのコーでも、小田原での国際会議でも、国境を超え人種を超え、心に何の隔たりを感じることもなくお話できるのも、MRAならではのことと思います。

もっともっと色々なお話をしたいので、何か一つでも外国語を話せるようになり

たいと考えて少しずつ勉強しております。パスカルも「精神と感覚は会話によって作られる」と言っています。与えられた機会をもっと有効に使いたいというのが、目下の最大の目標です。

上海から無錫に行った時、地平線まで続いているかのような菜の花畑が、春の陽光に輝いている素晴らしい光景を見て、他人を思い遣る心の輪が、この菜の花畑のように明るく拡がっていくことを祈りたい気持で一杯でした。

（会社役員　埼玉県浦和市在住）

（注4）榊たか子

日中友好埼玉県民会議副会長、日中友好浦和市民会議会長、遍照会特別養護老人ホーム白寿園理事長、埼玉県選挙管理委員会委員、埼玉国際交流語学院理事長。
国鉄労働組合初代婦人部長を経て、昭和三十年より浦和市会議員を四期十六年、昭和四十六年から埼玉県会議員を三期十二年務める。
日本は過去の過ちを二度と繰返してはならないという戦後の反省を原点に、長年日中友好に情熱を注ぎ、面倒を見ている中国人留学生や研修生たちからは「日本のお母さん」と呼ばれ慕われている。七八年の初訪中以来、十九回中国を訪れ、中国に多くの友人を持ち、昨年、上海を訪れた際、現地の青年団体が主催した古希の祝宴には六百人が集まったという。

29年振りに訪れたマウンテンハウス

沖田幸治（おきたこうじ）

敗戦の痛手未だ消えぬ昭和二十二年、私は日立造船に入社し、戦後初めて建造を許可された底曳網漁船の建造や、撃沈を免れた大型タンカーの鯨肉冷凍・塩蔵船への改造など、まず食料確保のための仕事を手がけた。

昭和三十年、当時の日立造船の松原社長がMRAの思想に共鳴し、労使双方の代表二名がスイス・コーのマウンテンハウスで開かれていたMRA世界大会に派遣された。その後、全社的にMRAが導入され、私の所属する設計部でもMRAを勉強

する職場集会が開始された。案内を見ても内容がよく分からず関心が湧かなかったが、人事担当者に熱心に誘われ、集会に初めて参加したところ、自分が求めていた何かに出会ったような思いがした。係長が几帳面にファイルしていたMRAの機関誌を借りて一気に読んだが、その世界的なスケールの大きさと素晴らしい考え方に共感した。

会社からは引き続いて労使双方から一名づつ、職長の中から一名、計三名がコー、またはアメリカ・ミシガン州マキノ島で開かれていたMRA世界大会などに派遣され、私も第五次の代表団の一員としてコーを訪れた。

その時、まるでこまねずみのように会場を走り回りながら、食事のテーブルプランや通訳などの裏方仕事を骨身を惜しまずやっていたのが、MRAの専従として働いていた**山崎房一さん(注5)**であった。それ以来、山崎さんからはMRAでの体験を通じて得た人生観などを教えていただいている。

輸出用船舶の設計業務に携わっていた関係で、世界各国に出張する機会があり、そのつど、業務の合間を利用して現地のMRA関係者の方々と交流させていただいたが、なかでも一年五ヵ月滞在したブラジルでは、ペトロポリスのMRAセンターにも泊めていただき、リオデジャネイロのタクシー運転手達のMRAの集会に参加

したり、港湾労働者のアパートの集会場で、学校の先生や実業家を交えて劇の打合せなどしたことが思い出される。

昭和六十三年、家内と共に二十九年振りにコーを訪れた。家内にとっては初めての海外旅行であったが、マウンテンハウスではさながら水を得た魚のごとく積極的に行動し、家内を大いに見直し尊敬を新たにした。会議の中で話をする機会を与えられた私は、

「二十九年前、コーで静かな時間を持ち、自分がいかに傲慢で支配的な夫であったかということに気付き、そのことを詫びる手紙を家内に出した。家内は今でもその手紙を大切にしている。

私は三十九年間、造船所の設計技師として船を建造・輸出し外貨を稼いで、一生懸命戦後の荒廃した日本の復興に努力してきた。そしてそれは成功したと自負しているが、貿易不均衡など外国の皆さんに大変な迷惑をかけていることも教えられた。

自分のこと、日本のことだけを考えて、他の国々への配慮が欠けていたことを反省している。

今回、再びチェンジする決心をした。まず、もっと広い豊かな心を持ち、物質的

ではないもっと深いところで人生をエンジョイすること。それから、世界中の人々がＭＲＡの精神で平和に暮らし、繁栄をエンジョイできる新しい世界を作るために一緒に働きたい」という決意をマウンテンハウスの壇上から述べ、次いで家内も、「主人を通してＭＲＡを知った。最初は普通の主婦である自分が実践するのは難しいと感じたが、まず、自分の身の回りでやれることから始めれば、自分にもできることはあるという自信を得た。これからも小さくてもできることから取り組んでいきたいと思う」と述べた。

また、その時、マウンテンハウスの本屋で「リッスン・フォー・ア・チェンジ」（ジャネット・キャンベル著）という本を購入した。同書は結婚生活を効果的に過ごすための秘訣、心の声に耳を傾け自ら変わることの大切さを多くの具体的な体験談を通して語った本であり、ぜひ日本語に訳して若い人達に読んでもらいたいと考え、著者の了解を得て二年がかりで翻訳を完成させた。ワープロ印刷の簡単なものだが、希望者にコピー代・送料のみの実費でお頒けしている。著者からの便りによれば、同書は平成元年にモスクワで開かれた国際書籍フェアで好評を得、ロシア語版の出版が決まったという。台湾でもすでに中国語で出版されており、読者を増やしつつあるという。

私はＭＲＡと出会ってから、取り越し苦労をしてくよくよと悩むことがなくなった。判断に迷った時は、ちょっと静まって心の声に耳を傾け、与えられた導きを素直に受け入れて実行すればよい。その結果、自我へのこだわりがなくなり、常に自由な心で楽しく人に接することができるようになった。

とにかく続けていくことの大切さを感じる今、これからも家内共々、月例会を初めとする関西のＭＲＡ活動のお手伝いを喜んでさせてもらおうと考えている。

（設計・監理技術者　大阪府豊中市在住）

（注5）山崎房一

昭和元年山口県に生まれる。昭和二十四年にＭＲＡ運動に参加、欧米駐在員を経て昭和三十六年に日立造船入社、マレーシア火力発電、パキスタン砂漠緑化ダム工事のマネージャー他海外工事を担当する。昭和四十五年、ディール・カーネギー・コース（企業成人教育）教育企画部副部長。昭和四十七年、陽光学院創立。昭和五十七年、母親心理学訓練講座開講、同年、新家庭教育協会創立、理事長。（社）国際ＭＲＡ日本協会理事。文化講演、社員教育等で幅広く活躍中。著書多数。

世界中の人々が助け合って生きていくならば

大熊洋子
おおくまひろこ

私とMRAの出逢いは、約六年前に遡ります。

日産自動車に勤めております主人に、「スイスのコーにあるMRA世界会議場マウンテンハウスで自動車産業について講演をして欲しいとの依頼がMRAよりあったので、夫婦揃って出席するように」とのお話が会社からありました。

主人はともかく、MRAの意味も知らずろくに英語も喋れない私が同行しても、却って周囲の方々にご迷惑をお掛けするだけだと思い気が進みませんでしたが、主

人から「外国では夫婦単位で行動するのが普通だ」と言われ、不安な気持のまま主人と共に出席いたしました。

マウンテンハウスは眼下にレマン湖を眺望する山腹に建ち、百年以上の歴史を持つ古城のような素敵なその建物には目を見張らされました。

ちょうど私達がコーにおりました時に、現在フィリピンで、アキノ大統領の下で外務大臣をしておられるラウル・マングラプス氏から、マルコス大統領時代、逮捕されるはずだった僅か二日前にアメリカに逃れたという緊迫感溢れる貴重なお話を伺うことができました。このような生々しい情報は日本のマスコミではなかなか報道されませんので、さすがMRAならではと感銘を覚えました。

また夜のプログラムの一環として行われた「世界の夕べ」では、各国の方々の民族色豊かな唄や踊りに楽しい一時を過ごしました。

二日目の朝食の際に、主人はさっさと外国の方々と他のテーブルに行ってしまいました。一体どうしたらよいのかと迷っておりましたら、相馬雪香さんがさっとそばに来られ、ご一緒に食事をしましょうとセルフサービスの場所にお連れ下さいました。

食事中も皆さんの会話の中に自然に溶け込めるように、通訳などのお心配りをして頂きました。今でもその時の相馬さんのお心配りとお人柄、そして洗練されたマナーを忘れることができません。私も人様に対してこのような態度で接しなければならないという生きた教訓になりました。

コーではお食事が済んだ後も、ウエイトレスがいてテーブルを片付けてくれるわけではありません。参加者自身が協力し合って、あっと言う間に綺麗に片付けられていく様子を目の当たりにして目を見張りました。

世界の国々の老若男女が一つになって働いている姿を見た時に、このように私達がお互いに助け合い理解し合えるように日々努力を重ねていくならば、必ずや戦争のない平和な世界が築かれるだろうと確信いたしました。

最初は不安な気持で訪れたコーでしたが、このような今まで想像もしたことのない素晴らしい世界を知ることができ、目の前が急に開けた思いがしました。

帰国後、田端のＭＲＡハウスから**婦人会(注6)**の通知を頂き、コーでの皆様の暖かい心遣いに対するお礼を一言申し上げに伺ったのがきっかけで、ＭＲＡの日本での活動に参加させて頂くことになりました。

四年程前、スイスのシルビア・ズーバーさんが来日された際に、小さなグループでもいいからＭＲＡの創始者、フランク・ブックマン博士の演説集**「革命の道」（注７）**の研究読書会を持ったらどうかと勧められました。

それぞれお忙しい方ばかりですが、何といっても実行することが大切と思い、自宅で会を持たせて頂いております。回数こそまだ少ないのですが、続けることに意義があると思っています。一回ごとにグループの皆様との親しみが増して、心を開いて語りあえる良き友となれたことを感謝しています。

先日勉強しました第二部(7)章「世界を再造する人々」の所に、『賢人達は最初のクリスマスの夜、星に導かれて遠い土地から来ました。私達の一人ひとりが、光に導かれて人類が求めている贈り物、いかなる世俗的な贈り物にもまさるものをもたらすことができます様に』という箇所がありました。

私は賢人ではありませんが、神の不思議なお導きによってコーに行くことができ、そして沢山の素晴らしい方々と出逢うことができました。老後にこんなに素晴らしい充実した人生が送れるとは思ってもいませんでした。

ＭＲＡで静かな時間を持って心の声に耳を傾けるということを教わってから、毎日を有意義に過ごせるようになりました。なかなか心の声が聞けない時は、心を白紙

に戻すように心掛けています。

私はＭＲＡに対する予備知識が全くと言っていいほどなかったので、コーでは吸い取り紙がインクを吸うような思いでした。ＭＲＡにはキャリアウーマンの方も沢山おられますが、私は家庭の主婦なので気負うことなく、まず身近の小さなことから始めて、少しずつでも世の中のお役に立てればと考えています。

最後に、「百聞は一見にしかず」と申します。コーに未だ行かれたことのない方は是非参加されることをお勧めします。私事で恐縮ですが、私をコーに行かせて下さった日産自動車と主人に、感謝の気持で一杯でございます。

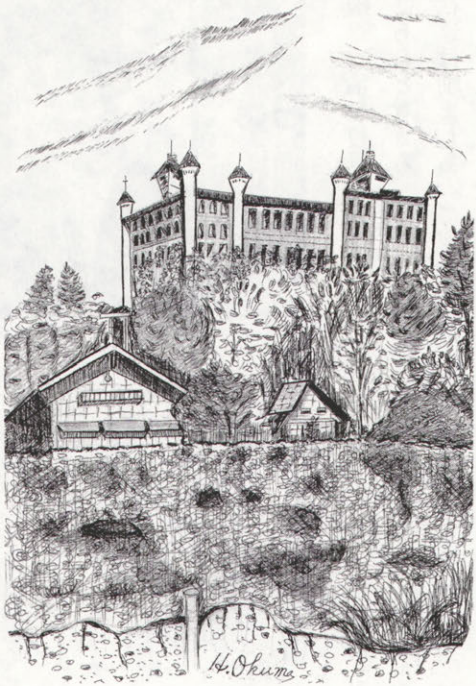
（主婦　東京都世田谷区在住）

（注6）婦人会

ＭＲＡハウスや会員宅などを会場に、定期的な会合や講演会、勉強会などを開催している。また、海外からのゲストを迎えての様々な交流などを通して国際親善に務めている。毎年一～二回バザーを開き、その純益を人道的援助プロジェクト等に寄付したり、発展途上国からＭＲＡ国際会議に参加する人たちに資金援助をするなどの活動を行っている。

（注7）「革命の道」

人の心が変わる時、社会が変わり国が変わると、世界中の人々に心の革命を訴え続けたフランク・ブックマン博士。一九二〇年代、ＭＲＡの前身オックスフォード・グループの時代から、一九六一年の死の直前に至るまでの約三十年間にわたるその博士の演説集。頒価五百円。


H. Okuma

チェンジの源（みなもと）

川口昌宏
かわぐちまさひろ

ＭＲＡは国際政治や複雑に入り組んだ経済の問題も、その源は結局私達一人ひとりの在り方にあると考える。まず自らが変わらなければ問題が解決しないことが分かった時、私達は励ましあって変わろうとする。そのことをＭＲＡではチェンジと呼んでいる。

チェンジには痛みがともなう。プライドや自尊心を捨てなければならないし、時には具体的な犠牲を強いられることもある。しかし、チェンジによってこだわりを

乗り越え、眼前の壁を越えることができれば、私達は、時に思いもよらなかった素晴らしい新たな世界へ踏み込むことができる。

そして、この様なささやかな自我の解放と連帯を通して、私達はゆったりとした深い心の充足を得ることができる。これはおそらく、信仰を持つ人が覚える喜びに通ずるものであろう。

ここに記す体験は、一九七三年に韓国に滞在した時のことである。私は大学に勤めているので、有難いことにまとまって使える長い夏休みがある。その頃、何年かにわたった長いスランプの終わりを迎えようとしていた私は、自分の在り方を変えて本当の自分というものを確かめてみたいと思っていた。

そこで夏休みに外国に出かけて、同じ分野の研究者と共同研究をしてみようと思い立った。どこに行こうかと考えて地図を開いたら、日本に一番近い韓国が目についた。しかし、私が全くと言っていいほど韓国の人々について知らないことに愕然(がくぜん)とした。欧米の人々の暮しは映画などを通してよく知っているのに、沖縄より近いとも言えそうな、お隣の韓国の人々の暮しを知らない。

どんな風呂に入るのか、トイレは「洋式」か、朝食は何を食べるのか。過去の歴史

を引きずっていて、日本と韓国の関係は近くて遠いと言われていることは知っていたが、なるほどと思った。職場の同僚達の目はほとんど欧米を向いているが、自分をもう一度見つめるという目的が研究の外にあるとしたら、私が訪れる最初の外国として最もふさわしいのではないだろうかと考え、韓国行きを決心した。

先輩達の人脈を通じて、私の母校の先輩でソウル大学の申教授が共同研究者として私を引き受けてくれることになった。申教授の同級生の記憶によれば、終戦前に日本に留学していた申教授は、日本の植民地政策に強く反発していたというので、少々心配していた。

ソウルでは妻と二人、夏休みで空いていた学生の下宿に置いてもらい、妻は身振り手振りでその家の主婦と台所仕事をしていた。申教授は勿論のこと、町の人々も親切で、覚悟はしてきたのだがトラブルは何もなく、楽しくそして成果の上がる十日間が過ぎた。

日本の終戦記念日の八月十五日はちょうど日曜日で、私達はソウルを離れてバスで郊外に出かけた。空気が透明なソウルの青空はまばゆく晴やかで、まるで私達の心のようであった。サッカーの練習をしていた子供達とも交流した。帰りのバスの

中で、私は弾む心を抑えかねて誰かと話したくて仕方がなかった。周囲を見回すと英語のリーダーズダイジェストを持った青年が目に入った。私は英語でこの青年に声をかけた。

しばらく話をしていたら、少し前の席に座っていた中年の男が突然立ち上がり激しく青年をなじった。

一体何を言っているのかと青年に尋ねると、その男はこう言っているという。

「お前は今日がどういう日か忘れたのか。今日は光復節だ。日本から独立した記念日に、よりによって日本人と英語で話すことはない。ここは韓国だ。奴に韓国語で話させろ」。

私は反論した。

「英語は今や国際語だから、お互い英語で交流してもかまわないではないか。私は韓国に来てまだ二週間くらいで、ここに持っている韓国語会話と文法の本で勉強しているが、とても話すことはできない」。

しかし、男は全く収まる様子はない。いよいよ激しく大声を出すので、乗客は皆、最後部の私達を振り返って見ている。私もまだ強気で、この男は何とわからん奴だ

と思っていた。やがて、男は自分の激しい怒りの理由をこう説明した。

「私の叔父は、日本に労働者として強制連行され、最後には殺された」。

私は一瞬にして彼の怒りを理解した。私は打ちのめされて、胃袋がきりきりと縮み上がり車に酔ってしまった。もう何も反論することはできなかった。

過去にその様なことがあったことは本を読んで知っていた。しかし、それは単なる本から得た知識であって、血と心のある人間の歴史ではなかった。あるいは歴史の本当の意味が分かっていなかったと言ってもよい。この時から私は顔を上げて町を歩けなくなった。人々はその素朴な笑顔の後ろに、この男の持っているような激しい怒りを私に隠しているのかも知れない。

歴史の事実を認めるか、それとも自分のプライドを守って閉じこもるか、私の心は二日間揺れ動いた。

確かに私はこのような状況に自分を置いてみようと覚悟して韓国に来たのだが、その様なことは過去の出来事であって、当時幼かった私などあずかり知らないことだ。それなのにあの様に責められたのではかなわない。友人達が欧米へ行く時、私はわざわざこの国を選んで来てやったのだ。客人に失礼ではないか。そんなに言う

なら帰ってしまおうかとさえ考えた。

しかし、幸いにして私は答えを見つけ出し踏みとどまることができた。もし帰ってしまえば二度とこの国に来れないだろうし、さらにひょっとすると他の国にも行くことができなくなると、悶々としている間に気付いたからである。この時初めて、国際理解ということは、人間として同じ地面の上に立つことだということを理解できた。この体験がその後の私の海外交流の原点となった。

一九八八年、私はMRA国際チームの一員としてタイに出かけ、そこでこの体験を披露する機会を与えられた。タイのMRA関係者の前で話しながら、どうして私はあの時逃げて帰らなかったのかということを改めて考えた。

それまで長い間、踏みとどまれたのは私の適切な判断によるものと思っていた。しかし、私達は善悪の判断はできてもそれに従うことはなかなか難しい。思うことと実行の間には、とても深いギャップがあると思っている。このことはMRAに加わって、実践ということを考えるようになってから、以前よりハッキリと気付いてきた。

ではソウルでその深いギャップを埋めたものは何だったのだろうか。そしてはっ

きりと私の心の中に浮かんできたのは、申教授の友情と、同行した亡妻の励ましであった。私が韓国やその国の人々をどう思おうとも、それより先に申教授は私を友として迎えてくれていたではないか。まず彼の許しがあり、そして町の多くの人々の許しがあって、私達はことが起こる前に、すでに何日間も人々の中で楽しく暮らしてこれたのではなかったか。妻も私の横で、男の激しい怒りを体験していたわけだが、私の心が決まるのをじっと待ってくれたのだ。

私のささやかなチェンジも、友達の許しと親しい者の励ましがあってのことであった。私達は愛されて初めてチェンジする力を与えられると思う。MRAの実践は自分のチェンジもさることながら、友を許し愛することで、チェンジの連鎖反応の肥料の一粒になることも含んでいると思われる。さらに自分が当事者となっている争いを収めようとすれば、「敵」を許し愛さなければならないという試練に直面する。

この時タイで会った元プロスポーツ選手で老錬のMRA会員のイギリス人がこう言って私を激励してくれた。

「チェンジはスポーツだ。面白いぞ。日本人とビルマ戦線で戦ったので、ある時まで日本人は嫌いだった。今度は平和のために戦う戦友になろうではないか」と。

（日本大学理工学部教授　千葉県船橋市在住）

私に与えられた役割

藤田寿子
ふじたひさこ

一九七九年八月末、当時、主人の勤務の関係でロンドンに住んでいた私達家族は、夏休みを利用してヨーロッパ大陸を旅行していました。

スイス・レマン湖のほとりにあるモントルーという町を訪れ、昼過ぎ、これからどこを見に行こうかという話をしていた時、突然、主人が書家であった自分の父が三十年前に書いた「書」が、この近くのマウンテンハウスというところに贈られたということを、思い出したのです。

マウンテンハウスとは一体どんなところで、その「書」とはどのようなものなの

かということに興味がありましたし、また、おじいちゃんのことを全く知らない子供達に少しでも具体的な形で父を偲んでもらえたらという思いもあって、そこを訪ねてみることにしました。

ホテルから電話をかけ、明日にでも訪ねたいからと申しましたところ、会議は今日までで明日は皆、帰ってしまうので、これからすぐ来られないかとのことで、早速、教えられた通り登山電車に乗って、山の中腹にあるコーという小さな駅に着きました。

駅には思いがけなく日本人が待っていて下さり、その方の説明で、マウンテンハウスとは「MRA」という国際的な団体の世界会議場だということを知りました。眼下に広がる素晴らしい眺望と、「白雪姫」のお城のようなマウンテンハウスに、まず目を奪われました。案内していただくままに建物の中に入ると、その広大で重厚、かつ豪華なこと、それまで、いろいろヨーロッパの壮大な建築物を見てきた私達でしたが、ただただ目を見張るのみでした。

大会議場ではちょうど会議が行われており、たまたま日本人の方が正面のステージでスピーチをされていました。ステージの真ん中にMRAのモットーである「絶

対正直」、「絶対純潔」、「絶対無私」、「絶対愛」の四つの絶対標準が日本語で書かれて四幅の掛軸となって下げられており、それが父の「書」だということは、すぐに分かりました。

会議が終わる頃、この「書」を書いた「フジタ・ファミリー」が来ているからと紹介され、五百余人もの参加者から暖かい拍手を受けましたが、それに応えて主人がその「書」を背にして英語で挨拶をしたことは、子供達にも私にも忘れられない感動的で誇らしい思い出の場面でした。

その夜は、日本人参加者だけで日本食の送別ディナーをするからと、私達も案内の日本人の方からお招きを受けていたのですが、その方と、そうこうしているうちにはぐれてしまいました。大きなマウンテンハウスの中をウロウロしておりましたら、そこへ、一人の紳士が人なつこい笑みを浮かべながら近付いて来られ、一緒に食事をしませんかと誘って下さり、建物の中もあちこち案内して下さいました。

その方はイギリス中部のチェシャーにあるMRAセンター、**ターリーガース(注8)**から来られたイギリス人の方でしたが、陽気で屈託のないお人柄に、イギリス人特有のユーモアのセンスを併せ持った方でした。楽しく歓談しながら食事をしているうちに、時間もあっという間に過ぎて、終電車の時間近くになってしまい、心配だ

からと親切に駅まで送って下さったその方と、イギリスでの再会を約束してお別れしました。

これが私とMRAの初めての出会いですが、その後は、夏休みには毎年コーに行くのが我が家の恒例行事になる位、子供達にも爽やかで楽しい印象を与えた一日でした。

ロンドンに帰って、間もなくロンドンのMRAハウスからお招きを受け、様々な方々にお目にかかる機会を得ました。その後も度々お招きを受けましたが、クリスマスやハロウィンなどの伝統的な行事にお招きいただいた時のパーティーは特に楽しく、何とも言われぬ居心地の良さを感じました。

その他にも、MRAハウスやMRAの劇場である**ウェストミンスター・シアター(注9)**で開かれていた月例会を通して、いろいろな方とお友達になり、イギリスでの生活がより楽しく充実したものになっていきました。どんなことであっても、心に何の負担も感じることなくごく自然に振舞うことができたということは、今、改めて考えてみますと、とても貴重な体験であったと思います。

英国社会は私達にとってとても居心地の良いものでしたが、こういう社会にどの

様にして成ったのでしょうか。

単に、社会保障が進んでいるとか民主主義発祥の地であったとかいうこと以外に、イギリス人自身の気質や習慣が大きく影響しているのではないかと思いました。思い遣りとユーモアのセンスを持ち、ちょっとシャイだがよく観察していてすぐ弱者の味方になり、自分も他人も大切にするイギリス人。大きなゆとりのようなものを感じさせる彼らを見て、つくづく「大人」だなあと思い、未来の社会というか、今後目指すべき社会とはこのような社会になるのではないかと思いました。社会というものは単に経済力だけでは比較できず、真の先進国となるために日本がお手本にしなくてはならないことが英国社会には沢山あると感じました。

帰国後、日本のMRAの方々と初めてお会いしました。英国のMRAとは多少違った印象を受けたのは、やはりそうした環境の違いからくる国民性の違いでしょうか。これから日本が大いにリーダーシップを発揮して、世界の融和を実現させていかなければならない今日、私達一人ひとりが変わっていかなければならないと思いました。そのために私は、少なくとも英国のような居心地の良い社会にまずなれたらと、英国で学んだことを自分の生活の中で実践していこうと考えました。

「サンキュー」、「プリーズ」、「ソーリー」という三つの言葉は、英国の家庭で最初に子供に教えるものだそうですが、これらは社会の潤滑油です。私もそれに習って、毎日の生活の中で出来るだけ多くこの言葉を使うように心がけています。

それから、「まず相手を信用する」ということも実行していきたいものです。日本の社会では、どうも逆の傾向が強く、仲間内では良いお付き合いが出来るのに、一歩外へ出ると冷ややかな関係になりがちで、他人との間に垣根を作りたがるように思います。

英国の新聞には個人が出す広告のページが沢山あって、それが広く利用されていますが、私もそれで安いテーブルコンロの売り物を見つけ、売主の家まで見に行ったことがあります。売主は偶然日本人の方でしたが、「この国では相手の言うことをまず信用するということを出発点としており、自分もここで暮らしているので、それを見習って正直に申します」とのことで、そのコンロの不備な点を幾つか挙げられ、だからこの様に安い値段を付けたと言われました。結局、それは買わなかったのですが、心に残る出来事でした。

そういえば、警察官にも駅員にも、自分の言い分を疑われたことはなく、最後はいつも笑顔でサンキューと言われたものです。友人の若い英語の先生もルームメイ

ト募集の広告を出し、知らない人と次の日から共同生活をしていましたが、相手に信用されると嘘がつけなくなるもので、こうしたことも住み心地の良い社会を作るための大切な条件の一つだと思います。

最近、ある国立病院の先生から、「笑顔を絶やさず、愛想よく、謙虚に振舞う」ことの大切さを教えていただく機会がありました。

朝から午後三時、四時まで、一分の休みもなく患者を診察している間中、それを実践しておられるのです。患者さんがこんなに長時間待ってくれるのだから、せめて笑顔と愛想で対応するのだとおっしゃる実に気持の良い先生です。

私は今、茶道を教えていますが、教える側と教えられる側という立場の違う人間関係の中で、この先生の態度を見習って、生徒さんに居心地の良さを感じてもらえるような教え方をしていきたいと念じています。

個人の力は小さくても、その個人が集まって出来ているのが社会ですから、まず自ら実践することによって少しづつでも変えていきたいと思っています。その行動の原点となるのが、ＭＲＡの四つの絶対標準だと思います。この「絶対」という言葉が付くことが大切なのです。七〇％、八〇％は努力しないでも、人間は自然に実行していることだと思います。それを一〇〇％にするというのがＭＲＡの考え方だ

と思います。これはとても難しくて意味の深いことなのですが、世界の融和ということが現実の問題となってきた今日、その一つの「カギ」となりうるものだと信じています。

私は、中学、高校をキリスト教主義の学校で学びました。戦後間もない頃で、東京では焼け野原にバラックが目立つ時代でしたが、学校は東京の外れで、焼失することもなく静かな環境の中に美しく建っておりました。

授業の中に「聖書」という時間があり、キリスト教について学びました。

ある時、「神は全能なり」ということについて説明せよという問題が出され、私は自分なりに、『この世界を造った神様には出来ないことはない。例え、苦しみや悲しみがあっても、それは神様が造ったものであり、人間に必要だから与えられるものである。

神様は「愛」であり、人間を愛すればこそ、それらの苦しみを与えて、人を更に強く賢くし、より完成させるための手段とするものである。だから、それによって人間が滅びてしまうことはない。つまり、その人が克服できる能力以上の苦しみや悲しみを、その人を造った神様が与えるはずがない。神様に愛されているから

こそそれらが与えられ、そのことによって更に人は磨かれるのだ』という答えを考えました。

大学卒業後、失恋を味わい、失意のどん底の中で、私は、神様と初めて出会いました。「神は全能なり」の一言が甦えってきたのです。『今、神様が試練を与えて下さっている。この試練を乗り越える力が私にはあり、今、私により大きな人間になれるチャンスが与えられている。神様は私を愛して下さっている』と思ったのです。

その時以来、いつも身近に神様を感じてはいましたが、MRAと出会って、それまでの「苦しい時の神頼み」的なつながりではない、神と人、そして人間同士のもっと深い大きなつながりのあることを教えられたような気がします。

神様は、私達一人ひとりに役割を与えてこの世につかわされました。その役割が何であるか、様々な出来事を通して語りかけておられるのだと思います。いろいろな体験から、私は必要なものは必ず与えられるという確信を持っております。私に必要だから与えられた「MRA」。その意味が何であるか神様の言葉を聴き、私の役割を果していかなければならないと思います。

（主婦　東京都武蔵野市在住）

(注8)ターリーガース

緑豊かなイギリス中部のチェシャー平野を望む丘の上に立つMRAセンター。元々、産業革命で一大財産を築いた四人家族が所有していた大邸宅で、十人の庭師と二十五人の使用人がいたという。この家では、二人の娘の仲違いが原因で争いが絶えなかったが、MRAに出会って仲直りできた姉妹は、この大邸宅を自分たちのためだけに使うのでなく、世界中の人々のために使ってもらおうと考えてMRAに寄贈した。マンチェスター、リバプール、ウェールズなどの工業地帯に近いこのセンターでは、労使問題等の解決を目指したセミナーがよく開かれる他、産業、青年、教育に関する会合やトレーニングコースが多く開かれている。

(注9)ウェストミンスター・ハウス

バッキンガム宮殿のすぐ隣に位置しているこの劇場は、第二次世界大戦で戦死したMRA関係者を供養するために一九四六年に建てられた。劇や映画の上演を通してMRAの考え方を伝える役割を担っているのを初め、MRAの国際情報センターとして、映画やビデオの制作や出版事業なども活発に行っている。

日本が「アジアの燈台」になるために

榊（さかき） たか子

「ＭＲＡとは一体何ですか？」と聞かれることがよくあります。そんな時は、「市議会、県議会議員として働いた二十八年間、道を誤ることなくまっすぐに歩んでこれたのも、ＭＲＡを知っていたおかげだと思います。誰が正しいかではなく何が正しいかという基準で物事を判断し、間違いに気が付いたら勇気をもってそれを正すことの大切さをＭＲＡから学びました。ＭＲＡは私にとって何にもまさる薬のようなものでございます」というような意味のお返事をしてきました。

昭和三十年、私は国鉄労働組合婦人部長の職を辞して、埼玉県浦和市議会議員選挙に社会党から立候補し当選しました。当時の私は、市当局を厳しく追求することに全力を傾けていました。

そんなある日、恩師と仰ぐ加藤シヅエ先生と今は亡き戸叶里子先生から、

「これからの時代は、目に覆いをして一直線に走る馬車馬のような政治家には良い政治はできない。物事をよく見て、静かに考えることを学ばなければならない」と言われ、ちょうど来日中だったノルウェーのイエンツ・ウィルヘルムセンさんと国会議員会館でお会いする機会を作っていただきました。これが私とMRAとの初めての出逢いでした。

その時、イエンツさんにMRAの世界大会にぜひ参加するように勧められた私は、昭和三十二年六月、アメリカ・ミシガン州のマキノ島で開かれていたMRA世界大会に参加しました。この時、私は浦和市議会の一年生議員であり、同時に国鉄関東支社の会計課の職員でもありました。

六月四日がMRAの創始者フランク・ブックマン博士の誕生日ということで、当時の**十河信二国鉄総裁(注10)**から、労働組合の役員で社会党員である私に総裁の代

理として博士に誕生祝いを届けてほしいと依頼されました。これも十河総裁がＭＲＡのよき理解者であったからのことと当時のことが懐かしく思い出されます。

その当時、海外へ出かけられる人は限られていましたので、私のような立場の人間が訪米するということは大変なことでございました。とにかく初めての飛行機の旅で何から何まで珍しかったのですが、ジェット機がない時代で、プロペラ機でアリューシャン群島を経由する長旅で、シカゴに到着した時には何も喉を通らないような状態であったことをよく覚えています。

ＭＲＡの世界会議場は、ミシガン湖のマキノ島というとても美しい島にありました。そこに世界中から人々が集まってくるのですが、それは私には想像もつかなかった光景でした。マキノ島には消防自動車が一台あるだけで、馬車が交通の手段として使われていました。

その会議には男女百人の日本の青年団のリーダー達が招待されていましたが、鈴木強先生、故戸叶武先生、当時の埼玉県鴻巣市議会議長であった三ツ木種理さんなど私達一行も若い人達と一緒に全米を旅することになりました。二週間の滞在予定が何と五十四日間の長旅になってしまいましたが、当時だからできたことで今なら

とても考えられないことです。

マキノ島滞在中は、世界中の国々から集まった方々と心を開いて語り合いました。通訳をしていただいたのがニュースキャスターの木村太郎さんのお姉さんの木村利根子さんという英語の堪能な方で、おかげ様でとても有意義な日々を過ごすことができました。

しかし、正直に申し上げればこの滞在中、

「ＭＲＡとは随分難しく、とても自分のような人間にはできそうもないことが多い。また、できそうなことはこれまで自分がすでに実行していることばかりではないか」という気持ちを抱いたのも事実です。

まず、正直、純潔、無私、愛というＭＲＡの掲げる四つの標準の上に、「絶対」という文字がつくことがどうしても納得できませんでした。およそこの世の中に絶対などということは有り得ないと思う人は多いと思いますが、私もその一人でした。アメリカ、カナダ、そしてハワイに立ち寄り帰国するまで、いいえ、その後も「絶対などということはないのだから私にはＭＲＡはできない」という気持ちが私の心のどこかにあって、いっそ逃げだしたいと思ったこともたびたびありました。

その一方で、

①自分の国の民族衣装を大切にする

②目的をしっかりと持って行動する

③人を指さして批判する前にその人の立場に立って考える。相手に望むことは先ず勇気をもって自ら始めよ

④日本はアジアの燈台になれ

というブックマン博士の言われた言葉も忘れることはありませんでした。

いずれにいたしましても、この大会での体験が最初に申し上げました通り、私が地方政治に携わっていた時代、人様に恥じるようなこともせず、まっすぐに目を見て話ができる素晴らしい日々が送れた原動力になったのだと感謝しています。

もちろん、私達は毎日間違いを犯しますが、勇気をもってその間違いを正す努力をすることがMRAなのだと理解することができ、絶対という言葉に対するこだわりも徐々に消えていきました。やはり少し不正直な正直というものはないのだと思います。

「日本はアジアの燈台になれ」というメッセージの意味を私は随分考えました。日

本が第二次大戦に突入しようとしていた頃、女学生であった私は軍国主義教育を徹底的に受けた軍国娘として頑張っておりました。終戦後、

「この戦争は間違っていた。私達はこの恐ろしい戦争を二度と繰り返してはならない」と深く反省し、アジア、そして世界の平和と友好を心に誓った私が得た結論は、私達一人ひとりがその燈台建設の礎石となる決意を持たなければならないということでした。

一九七八年に初めて訪中して以来、十九回中国を訪ねました。

「日本が戦争のためにいろいろとご迷惑をかけて本当に申し訳ありませんでした」と私が中国の方にお詫びしますと、

「歴史を忘れることはできないが、許すことはできます。これからは平和な関係を築き、子々孫々に至るまで仲良くしようではありませんか」と言って下さいました。

日本とアジアの国々が力を合わせて、一歩一歩、その土台を築くためのあらゆる努力を重ねて初めて立派な燈台も築かれ、アジアに、そして世界に向けて平和の光が放たれるのだと思います。

八九年一月、私は北浦和に**埼玉国際交流語学院(注11)**を開設し、中国の青年を対象に日本語教育を始めました。これまで私は日中友好運動を進めてきましたが、本当の友好とは心を開いて語り合い、お互いの文化や習慣に対する理解を深めることであるというのが私の信念です。その基本である言葉を学ぶことから始めなければならないとの思いから、友好運動の具体的実践の一つとしてこの学校を始めさせていただきました。

中国とは貨幣価値も違い、習慣や風俗ももちろん違いますので、生徒の日常生活には私達が想像する以上の困難がともなうと思われます。だからこそこの仕事に携わる私達の責任は重く、言葉が上達するだけではなく、日本で学んでよかったという喜びを持って帰国してほしいとの願いを込めて努力している毎日です。

中国の元旦にあたる一月の春節には紅白の大福を生徒と先生に届けましたが、ささやかなお祝いの品にも心がこもっていれば喜ばれるものです。三月の日光への修学旅行、四月のお花見、そして開校一周年の式典等々の行事の一つひとつにMRAの精神を少しでも入れたいと願っております。

授業は厳しく、そして思いやりと愛情のある指導をと思いながらも、まだまだ壁に突き当たることの多い日々ですが、全ては私に与えられた試練だと思っています。

ブックマン博士が「目的を持つ者は強い」とおっしゃいましたが、私は日中友好という確かな目的を持って中国人のお世話をさせていただいています。それが私の生きがいでもあるのです。

MRAとは、決意し実行する時から始まるものです。いくらMRAを昔から知っているからといっても、言い訳ばかりしていては始まりません。勇気をもって決意し少しでも人様のお役に立てるよう、ご一緒に歩んでまいりましょう。

（日本語学校役員　埼玉県浦和市在住）

(注10)十河信二　国鉄総裁

明治十七年愛媛県生まれ。愛媛県西条市長などを経て日本国有鉄道総裁を二期八年間務める。新幹線の産みの親として知られる。昭和三十一年にスイス・コーのMRA世界大会に参加し、「日本が道義的な思想によってつくり直されることによって、日本はアジアの燈台として世界の歴史に貢献できる」とコーの壇上で述べた。その後、小田原のMRAアジアセンター建設の中心メンバー、あるいはMRA世界大会委員長として日本におけるMRA活動を積極的に支援した。昭和三十二年の夏、敵対していた当時の小柳勇国労委員長（後に参議院議員）と浦和市でMRAの劇「明日への道」を一緒に観劇、農村の水騒動の解決をテーマにした劇に感激した二人の話し合いによって、予定されていたストライキが中止され労使間に信頼関係が築かれるきっかけとなったというエピソードがある。昭和五十六年没。

(注11)埼玉国際交流語学院

一九八九年一月十日、埼玉県浦和市（北浦和駅前）に開設。午前・午後の二部制、定員二百八十名。上海出身の元埼玉大学留学生、馬照富氏が専務理事を務め、上海、太原、大連、北京、鄭州などから来日した中国人就学生たちに日本語を教えている。

良心的な経営方針と、全講師の三分の一が中国語を話せるなど中国人就学生たちに対するキメ細かな配慮には定評があり、良心的な日本語学校としてマスコミでも度々紹介されている。授業内容は、就学生を金儲けの手段としか考えないような日本語学校とは比べものにならないくらい厳しい。

「中国の発展に役立つ青年を育てるために全身全霊をかけて世話するが、中国の役に立たない人間を育てるつもりはないので、厳しく鍛えたい。形だけでの保証人では心が通わないので、時間はかかるが、日中友好に貢献したい、中国青年の役に立ちたいと心から願っている人を探している」と榊理事長は語る。

イラスト　大熊洋子

社団法人 国際MRA日本協会
〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5
東光苑マンション802号
TEL : 03-5721-6861 FAX : 03-5724-6880

発行

社団法人 国際MRA日本協会